

はじめに

国連の定める国際山岳年は、1992年にブラジル・リオデジャネイロで開催された「地球サミット」の実行プログラムとして発足し、この目的を「世界の山岳地域の持続的発展」としました。多くの議論の中から国際山岳年では、毎年活動日を12月11日と定め、年ごとに解決すべきテーマを設定した上で、広く世界的な活動を推進することにしました。日本ではこの国際山岳年の目的に沿って、2002年に国際山岳年日本委員会を発足させ、この年に東京青山の国連大学で、内外の研究者、山岳関係団体、NPOなど、関連する団体や機関に呼びかけてシンポジウムを実施しました。このシンポジウムをきっかけとして、「国際山岳年プラス10」の実行委員会が組織され、10年後に向けて活動を継続していくことを確認した上で、報告書「我ら皆、山の民」を刊行しました。この著書では山岳地域に関わる多岐の内容が網羅されています。その内容には、研究者の立場で、また、山の魅力に引かれた登山者の立場で山や山岳地域の持続性が指摘され、さらに山々の未来や山の民、山岳地域の森林などをテーマとした山岳学の提唱などが記載されています。これらを踏まえ、あらゆる角度から山の重要性が理解される中で、祝日「山の日」の制定への歩みを強めるべく、2010年には制定協議会を立ち上げて制定までの議論を進めることにしました。

10年後の2012年6月に国際山岳年日本委員会では、予定通り「国際山岳年プラス10シンポジウム」を、日本大学で内外の研究者や山岳関係団体などが一同に会して、研究集会を開催しました。集会では世界や日本の山岳地域の持続的発展について議論を交わし、報告書「みんなで山を考えよう」を刊行しました。この報告書では2002年からの10年間で、地球温暖化を含め日本や世界の山岳地域を取り巻く環境の変化から、研究者の研究分野や登山家の活動内容の報告に基づいて、山岳地域の持続的発展には、アカデミズムの視点が重要だとしています。その上で、この理解を国民に広げるためには、国際山岳年の考えに基づき祝日「山の日」制定に向けた具体的な活動が指摘されました。併せて活動の後押しとして国会議員による「山の日」制定議員連盟が発足し、また、一般財団法人全国山の日協議会における制定への議論から、2016年には8月11日を国民の祝日「山の日」が制定されました。

この制定を踏まえ、日本大学の自然科学研究所と地理学科の主催、一般財団法人全国山の日協議会と公益社団法人日本山岳ガイド協会が共催して、「日本と世界の山をみんなで考えよう」ー国民の祝日「山の日」制定の意義と国際山岳年2022に向けた取り組みーとして国際シンポジウムを開催しました。特に、祝日「山の日」が関係者の努力で極めて短期間で制定された背景には、地球温暖化など環境の変化で、山岳地域に賦存する多種多様な自然資源と多くの経済的資源の危険性に直面して、早急にこの保護と保全の必要性が求められたこと、古代から今日まで日本国民の心の中に、山を信仰対象に精神的支柱とする文化的思考が根底にあったと言えます。

以上の活動成果は、2017年に長野県上高地で開催された第1回「山の日」記念全国大会から、2022年の今年、山形県で開催された第6回の全国大会へと継続しています。その一方で、「山の日」をさらに広く国民に周知する全国大会を継承しつつも、日本だけでなく世界の山岳地域を取り巻く環境の大きな変化から、科学的視点に基づく学問研究の必要性が重要だと改めて指摘されてきました。

以上の経過を踏まえ、2012年から10年経過した2022年の12月に国際山岳年日本委員会では「国際山岳年プラス20」シンポジウムin黒部を、一般財団法人全国「山の日」協議会の主催で、多くの団体の後援を受けながら、国際山岳年が設定した12月11日に、黒部市芸術創造センター「セレネ」で開催する運びになりました。

今回のシンポジウムのタイトルは、「我ら皆、山の民」ー現在と未来ーとしました。地球温暖化による気候変動は自然環境に大きな負荷を与え、地球的規模の自然災害に直面し、さらに経済発展の果実を十分に受けない山岳地域は、インフラの脆弱から人々に多大な影響を与えています。シンポジウムでは厳しい自然災害と対峙する山岳地域で生活する人々、山を愛する人々の持続できる未来を、日本や外国の研究者、山岳地域で活動する人々と一緒に、科学的視点で考えることにしました。シンポジウムの講演と各セッションの概要は以下の通りです。

12月10日(土)の講演Iでは、世界の山岳地域の持続的発展について、山岳国キルギスがどのように問題解決を行ってきたかについての報告です。

セッション1では、山小屋と登山道の取り組みと安全への歩みとしました。山岳地域に頻発する自然災害において、登山客の安全のために、登山道や山小屋の整備が大きな課題になっており、さらに、近年、高齢者の登山客が健康やアンチエイジングのため、低山利用も増えて状況下で、山小屋や登山道を管理する関係者のこの整備の取り組みについての報告です。

セッション2では、山岳地域の災害と復興の経緯についてです。元来、山岳地域は不安定な自然環境から、居住する人々は細心の注意をして持続的に生活を維持してきました。また、脆弱な自然環境にある山岳地域では、この環境と折り合って過度な利用を制限してきました。しかし、地球温暖化の影響で山岳地域では洪水などの自然災害が頻発し、人々の生命と生活を脅かされています。この状況は未来も厳しいと予想されており、これを回避する対策を歴史的視点からこの地域の復興を考えます。

セッション3では、山岳地域の自然資源の保護・保全対策です。山岳地域は多様な諸生物の宝庫であるとともに、人々の命や生活を持続させる水資源や森林資源の多くが賦存しています。これらの資源はこれまで経済的価値のみに焦点が当てられていましたが、この地域は多様な諸生物の生息する空間であるため、どのようにこれらの資源を保護・保全するかが課題となっています。

最後の講演IIでは、山の日制定に至る経緯を、国際山岳年の20年間の活動から説明し、その上でこれからの登山界のあり方の報告です。

12月11日の講演IIIは、持続的山岳地域開発のあり方について、いかなる方法が効果的なのかについて焦点を当てました。

セッション4では山岳ジオパークの現状と国民への普及です。ジオパークは単に山岳地域の成り立ちを地質構造や地形などを調査し紹介するだけでなく、この地域で育まれてきた歴史や文化、産業などの立地などについて理解します。その上で、ジオパークを広く国民に認知してもらう展望は、この地域に賦存する自然環境の価値と役割、観光資源として活用方法の理解を深めることを考えてみます。

セッション5では山岳地域の観光利用拡大による注意点です。山岳地域の未来を考えるヒントには登山客や観光客が増える中で、自然や自然環境の保護を徹底して、オーバーツーリズムを回避しつつバランスの取れた観光の方策を検討します。

クローージングセッションではセッション1からセッション5のテーマで、現在の山岳地域にどのような問題や課題が存在し、各セッションでどのような議論が行われたかについて、オーガナイザーから報告を受けます。その上で山岳地域の未来に向けた持続的発展には、如何なる方策が有効なのかについて討論が行われます。

2002年に発足した国際山岳年日本委員会からの20年間に、地球温暖化や経済成長などの影響から、山岳地域の取り巻く環境が変化することで、山岳地域の未来は保証されるのかを各分野から議論しました。議論の中心は、山岳地域の自然環境やこの地域で暮らす人々を緩和させる方策が必要であるとなりました。さらに、ライフスタイルの変化でこの地域を利用する人々は増加していますが、行動の安全性を保証した上で、この地域の持続的発展には人々の深い理解が求められています。今回、このシンポジウムが全国「山の日」協議会と共催したことは、祝日「山の日」が提唱する「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」の趣旨を、深く国民に世界の人々に発信して、変わりゆく環境に対する持続性と緩和策が議論できたと考えています。

黒部市で開催したこのシンポジウムは、日本や世界の山岳地域の自然環境や人々の暮らしを安定して持続させるため、12月11日「国際山の日」の周知と理解を深めるため、毎年この日を中心に継続的に活動を推進することにあります。もちろんこの考えは、現在活発に議論されているSDGsの目的の一端に合致していることから、これらの情報を黒部市から発信できたことに意義深いものがあると思います。

終わりにこのシンポジウム開催にご尽力いただいた黒部市、後援をいただいた多くの団体、機関に感謝申し上げます。

水嶋 一雄（一般社団法人黒部川扇状地研究所所長）